

手書き文字が言葉を実らせる

言葉を精神の糧に、縦に書け！

最近、人々の言葉が力を持たなくなった、とおっしゃる石川九楊さん。インターネットには、次から次へと上書きされる情報が洪水の如く溢れ、テレビをつければ、政治家に代表される人々の朝令暮改の言葉が虚しく響く……。人間が紙と向き合い、責任ある文字を紡いでゆく手書き復権への提言を聞いた。

書家・京都精華大学教授

石川九楊

●いしかわ・きゅうよう 1945年福井県に生まれる。京都大学法学部卒業。著書に『書の終焉—近代書史論』（同朋舎出版、サントリー学芸賞受賞）、『日本書史』（名古屋大学出版会、毎日出版文化賞受賞）など。

過剰な情報氾濫社会

私はパソコンを持っていません。携帯電話も、クレジットカードも持っていない。会社勤めなら職場では必要ですが、仕事柄、私には必要ないものですし、家庭や教育の場ではできる限り遠ざけるのが賢明です。これらを持たずに生活すること

は、現代社会を心静かに生きるための最善の策であると思っています。

いまは文部科学省関係の書類などは電子メールで送るようになってるので、そういう面では周りの人に迷惑をかけて申し訳なく思うところもあります。

しかし、こうした電子機器の発達には、ただかかここ四半世紀以内の近年の出来事です。にもかかわらず、

まるでそれが不可逆な流れだといわんばかりに、幅をきかせています。

今日の世に氾濫するパソコンや携帯電話などの情報機器に象徴される現代商品は、歴史的な文化を崩壊させている側面があります。

たとえば、日本語仮名書き論やローマ字化論は文化的な決着がつかぬまま消失してしまい、また必要のない手紙の領域まで横書きが浸透して

います。

これまで築いてきた文化が、通信機械に圧倒されてしまったのならば、膨大な時間をかけて築いてきた文化とは、いったい何だったのでしょうか。いまの日本人はそれを問う気力さえ、なくしてしまっただけでしょうか。

は不思議でなりません。

情報機器に代表される現代商品とそれにまつわるサービスは、文化を破壊する一方、人間自身が育てるべき能力をも削いでいます。

車を運転するときにカーナビに頼っていけば、街の地図が頭に浮かんでこなくなります。カーナビの出現によって、道順や街の様子を記憶し、覚えていた能力がすっかり失われてしまっています。

新しい技術とその商品は、もう少し、いままでの文化と美しく馴染むスピードと距離感を保つことが必要です。

私は、パソコンや携帯、クレジットカードを持たないことで、自分自身を、情報通信や消費の端末機関に堕してしまわないように注意しています。現在のような、さしたる必要もない商品が過剰に氾濫する時代に

は、遅れてついていく、あるいは、いくつかは拒否する——こうした意識的な防衛策をとることが必要だと思っています。

言葉が軽んじられている

最近では人々の言葉が力を持たなくなりました。政治家に代表されるように、昨日言ったことが今日はもう変わっているような発言が、なんと多いことでしょう。しかもそれを咎める人はほとんどいません。

しかし残念なことに、私たち一般生活者の姿も似たり寄ったりです。私たちの社会の文化や教養のありようが、鏡のように、政治に映っているのです。

言葉と文字が軽視されている問題は、テレビに象徴的です。ニュースや報道番組では、毎日のように字幕